



2015 年 (平成 27 年)
12月号 (No. 847)

公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価 1部 150 円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>

e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目 次

創立110周年記念式典・祝賀晩餐会開く	
580人の会員が全国から参加……………	1
UIAA総会2015韓国・ソウルで開催……………	6
ブータン・ガンカープス大展望トレッキング14日間……………	8
新入会員……………	9
『日本百名山』英訳版をめぐる……………	10
追悼 松浦輝夫氏を偲ぶ……………	11
活動報告……………	12
自然保護委員会／山行委員会／	
三水会／アルパインスケッチクラブ	
支部だより……………	15
北海道支部／宮崎支部	
図書紹介……………	16
図書受入報告……………	19
Climbing & Medicine・70……………	20
会務報告……………	21
会員異動……………	22
ルーム日誌……………	22
INFORMATION……………	22
編集後記……………	23

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木……………10～20時
水・金……………13～20時
第2、第4土曜日……………閉室
第1、第3、第5土曜日……………10～18時

創立110周年記念式典・祝賀晩餐会開く 566人の会員が全国から参加

日本山岳会創立110周年記念式典・祝賀晩餐会が12月5日、東京・新宿の京王プラザホテルで開かれた。皇太子殿下がお忙しい公務のなか講演会・記念式典に出席されたのははじめ、566人の会員が参加。また来賓をお招きして、新たなページを飾る意義ある祝賀会を実施した。会の偉大な業績を振り返るとともに、さらなる発展を誓った。

第1部 記念式典 伝統と歴史を誇りに発展誓う

■会長挨拶 財産は多彩な人材

会場には60のテーブルが並び、これまでと同じように「富士山」「槍ヶ岳」「北岳」などの山名が表示された。席は混乱を避け、すべて指定された。中央ステージの両脇には、大きなモニターが設置され、記念式典・晩餐会の進行状況

がリアルタイムで映し出された。

小林政志会長は次のように挨拶した。「110周年を迎えることができた。誠に光栄である。日本山岳会は常に国内外の山岳界をリードし情報発信し続けてきた、伝統と歴史のある山岳会であるとして負っている。それは多くの方々のご支援・ご協力の積み重ねの賜物である。改めて深く感謝したい。マナスル初登頂に続く数々の海外遠



挨拶する小林政志会長

征は、いつも新しい視点で進んできた。会が所有する文献、図書、絵画、写真などは文化的にも歴史的にも価値高いものだが、一番の財産は様々な分野に精通する多士済々の会員の存在と、会員同士が事業活動に自由に参加、交流し、楽しみ刺戟し合う風土である。創立

の原点に立ち返り、新しい出発点としたい。ご指導をお願いしたい。」

■物故会員55人に黙祷

物故会員に対して黙祷した。昨年の晩餐会以降に亡くなられた会員は55人。山田二郎・名誉会員は89、93年に2期会長を務めた。ネパール語辞典を編纂し、ネパール国王から勲章をもらった三枝礼子、ヒマルチェリ登山隊にドクターとして参加した住吉仙也、日本人として初めてエベレストに登頂した松浦輝夫、日本山岳会百周年記念事業として出版した『新日本山岳誌』の編集委員長・高木泰夫、池田錦重は、日本人として初めて北極点到達を目指し、日大隊を指揮した。会報「山」の編集長を務めた岡澤祐吉、名誉会員・近藤等らが還らぬ人となった。

■来賓挨拶

谷垣禎一(全国「山の日」協議学会長)、八木原罔明(公益社団法人日本山岳協会会長)ら15人の来賓にご臨席いただいた。それぞれ紹介があった。

来賓を代表してお二人から祝辞をいただいた。谷垣氏は「来年8月11日に16番目の国民の祝日として山の日がスタートする。山に親しみその恩恵に感謝する趣旨だ。山が持つ意義を広く考えたい。自然と触れ合うなかで子どもたちがおおらかでたくましく育つてほしいと願う。マナスル登頂60周年でもある。山の日と重ね合わせて喜んでいる」と話した。また、八木原氏は「20年には東京でオリンピックが開催される。スポーツ・クライミングが競技種目になるところまできている」などと語り、それぞれの立場から日本山岳会の110周年を喜び、祝福していただいた。

■平出会員に秩父宮記念山岳賞

第17回秩父宮記念山岳賞は、平出和也会員の「世界的な山岳登攀と独自の技法による撮影実績」に決まった。平出会員は、2008年のカメット南東壁の初登攀で日本人として初めてピオレドール賞



祝辞を述べられる八木原日山協会長

を受賞したように、世界のトップレベルの登攀活動を続けながらカメラマンとして数々の貴重な映像を残してきた。自身のカメット南東壁でのビデオ撮影をはじめ、日本人初の8000m峰14座登頂者となった竹内洋岳さんのガッシャブルムII峰などに同行して撮影を行なった。13年には、三浦雄一郎さんが世界最高峰でエベレストの頂上に立つまでの様子を撮影した。撮影技術も独創的で、エベレスト山頂でゾンデ棒を使った俯瞰撮影や、クレパス底からの仰望撮影、さらに田中陽希さんの「日本二百名山一筆書き」での並走撮影など、独自の技法を駆使して登山の記録を残している。一流登山家たちの

記録を数多く撮影し、人々に感動を与えてきた功績は大きい。

表彰式が行なわれた。平出会員は「実は1ヶ月ほど前、子どもが生まれた。エベレスト頂上での撮影は、ポールを立て8851mくらいから撮った」などと話した。

■110周年記念事業報告

記念式典の最後は、記念事業の報告だ。ほぼ3ヶ年にわたって続けられている。海外登山、国際交流、支部会員参加事業、出版、講演会の5つの部門で行なわれており、説明は110周年記念事業実行委の尾上昇委員長が行なった。とくに学生部の海外登山が大成

功だったことを紹介し、会員の資金援助に感謝した。昨年は女子登山隊がマンセイル峰に、今年は男子隊がジャネII峰に初登頂した。出版事業では、昨年7月の『新版日本三百名山登山ガイド』に続き『インド・ヒマラヤ』、『ヒマラヤの東—山岳地図帳』、『改訂 新日本山岳誌』の出版が相次ぐ。

第2部 祝賀晩餐会

新入会員を迎え和やかに歓談

■再生委で改革進める

記念式典を終え、30分の休憩のち祝賀会を再開した。小林会長が再び挨拶に立ち「入会者は多いが、退会者も多く会員増につながらない。再生委員会をつくって会の改革を進める。YOUTH CLUBの活動強化と支部活性化が柱だ」などと語り、現実に立ち返って会員の支援を訴えた。

■新永年会員は36人

永年会員が紹介された。新しい永年会員は36人。会員番号5900〜6092と復活会員だ。65年4月から翌年3月までに入会し、以降継続して50年間、会員として活躍された方々で、晩餐会には9人が出席、小林会長から永年会員章を手渡された。

神崎忠男会員が新永年会員を代表し挨拶した。「素晴らしい登山人生を送った。感謝したい。同じ年に永年会員制度が導入された。制度も永年会員である。会費が免除され財政を圧迫しているとか。50年目のご褒美として晩餐会の参加費も免除だったが、今年は納入しなければならなくなった。かつて現役のころ、有料化を考えたことがあるが、先輩から叱られた。開催費用を軽減してでも会員に負担

をかけないように——と。日本山岳会がいつまでもよき友、よき仲間、よき先輩・後輩に巡り会える楽しいクラブであってほしい」と、ちよつぱり厳しかったが、大きな拍手があった。

【新永年会員（＊は復活会員）】

百瀬寿雄＊、佐藤光俊＊、関孝治、高橋正彦、姫野和記、瀧島清、佐藤節子、本多罔雄、金子泉、田村英也、大澤宣彦、竹尾宗和、松澤憲夫、柏敏明、酒巻吟一、山田硅二、滝本幸夫、松野賢珠、尾上昇、神崎忠男、岡部紀正、板橋元一、糸原学、梨羽時春、田中俊甫、高緑繁伸、青木正樹、宮沢章、中西豊和、佐藤浩幸、橋本清、白旗史朗、中川智康、松坂良一、平位剛、小池恭弘

■新入会員は232人、47人出席

続いて新入会員の紹介。今年は232人と、これまでで最多の新入会員を迎えることができた。次の時代を支える人たちだ。晩餐会には、うち47人が出席しステージに上がった。若さで会場が一段と明るくなった。代表挨拶に益子穂高さんが進み出た。高校2年生だと紹介されると、会場はどよめき大きな拍手が巻き起こった。益子



盛大な拍手で迎えられた新入会員たち

さんは「両親が山好きで、穂高」と名付けてもらった。北は大雪山、西は大山を一緒に登った。高校には山岳部がなく、日本山岳会に入会した。日本は7割が山で、その山がそれぞれに個性を持っている。日本に生まれてよかったと思う。穂高、北岳からの眺めが忘れられない。将来は海外の山にも登ってみたい」と語った。

学生部ネパール東部登山隊の6人が登壇。隊長・真下孝典さんは「昨年の女子隊に続き、今年は男子隊がチベットの国境稜線の未踏峰・ジャネⅡ峰に登頂することができた」と挨拶、会員の支援・協力に感謝した。

■恒例の鏡開き

恒例の鏡開きは、小林会長のほか尾上・記念事業実行委員長、谷垣・全国「山の日」協議会長、神崎・日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト会長、秩父宮記念山岳賞を受賞した平出氏、八木原・日本山岳協会会長の6人で行なった。お酒は故今西壽雄名誉会員ゆかりの「四海王」。森前会長の音頭で乾杯した。

■講演会・写真展・図書交換会

晩餐会に先立ち、午後1時30分からエミネンス・ホールで海外登山の報告、また、秩父宮記念山岳賞の受賞記念講演会が開かれた。4階では写真展・図書交換会が行なわれた。写真展は、アルパインフォトビデオクラブが開催し、50点強の作品を展示。皇太子殿下がスイス・シーニゲプラッテから望んだアイガーとメンヒの写真を出版された。昨年6月、日本・スイスの国交樹立150周年を記念しスイスを訪問された際、シーニゲプラッテを散策されている。

翌日の懇親山行は山行委員会が主催し、本栖湖北西のパノラマ台で行なった。精進湖登山口から登り始めて中ノ倉峠まで歩き、本栖

湖に下りた。中ノ倉峠は千円札に描かれた富士山の展望地。そのとおり富士山が美しかった。およそ90人が参加、新宿駅西口から2台のバスに分乗して出かけた。

（文・高橋重之、写真・奥田有恒）

110周年記念海外登山報告・講演会

■学生部ネパール東部登山隊

【隊長】真下孝典（青山学院大4年）
【登攀隊長】宮津洸太郎（明治大3年）
【隊員】木村健太（東京工芸大4年）▽芦刈新之介（電気通信大3年）▽橋井駿（専修大3年）▽野澤岳大（立正大3年）

期間は9月3日から10月23日まで、ネパール東部カンチェンジュンガ国定公園内、チベット国境稜線にあるジャネⅡ峰およびローナク・ピークの初登頂を目指した。ローナク・ピークは撤退を余儀なくされたが、ジャネⅡ峰は初登頂した。

9月4日、カトマンズに到着。8日、タブレジェンに到着しキャラバン開始。高所順化を経て26日、ローナク・ピークへアタックする

も岩もろく撤退、ジャネⅡ峰へ転進する。

10月3日、全員ABC入りし、翌4日、アタック開始する。頂上まで距離は約3500m、標高差は約650m、フィックス8本（50m）。午前4時、先発隊が出発。30分ほどフィックス×2ピッチで氷河舌端を乗り上げ、わずかに傾斜のある氷河帯を進む。大きなクレパスは開いていない。氷河が橋状に残っている部分を登る。その後は傾斜の強い斜面を右上、クレパスの多い箇所や傾斜の強い危険箇所を進み8時、氷河帯通過。8時40分、頂上直下に取り付いた。緩傾斜の雪田を最後の雪壁に向け直進。徐々に傾斜の強くなる雪壁、頂上へ直登するラインを登り、12時5分、全員登頂した。

（速報は会報「山」11月号に）

■秩父宮記念山岳賞講演

未知への挑戦 平出和也会員

1979年生まれ、長野県諏訪郡富士見町出身。子どものころより、自宅から眺めていた八ヶ岳や南アルプスで山歩きを始める。小学校から剣道を始め、中学校では長野県3位になる。高校では競歩の選手として全国5位になり、東



講演する平出和也会員

海大学に進学後も陸上部に所属し、日本選手権10位になる。その後、山岳部に転進。

危険な所で高いパフォーマンスを

決められたルールのなかで他人と競う競技スポーツに限界を感じ、自由な発想で活動できる山岳部に魅力を感じた。翌年、2001年にはヒマラヤの未踏峰、クーラ・カンリ（7381m）に初登頂、8000m峰のチョー・オユーをスキーで滑降した。山とともに生きる人生がスタートしたのである。

初登頂や未踏ルートにこだわりの続け、2008年インド・カメット（7756m）の南東壁より初登攀・登頂によって、パートナーの谷口けいとともに「第17回ビオレ

ドール賞」を日本人として初受賞した。

課題を見出す嗅覚に伴う技術

僕より登れる人なんて国内外にいくらでもいる。僕に人より優れている部分があるとしたら、人のやったことのない「課題」を見つけて嗅覚、そして、それを成し遂げる能力、そのバランスかな。いくら登る技術があっても、その課題を見つけることができなければ、そこには絶対にあたどり着くことはできない。カメットの未踏の南東壁という魅力的な課題を見つけ、それを登攀し得たこと、それがビオレドールにつながった。

人の夢をサポートする登山

同じ年、竹内洋岳氏（日本人初の8000m峰全山登頂者）のパートナー兼カメラマンとして同行。これを機に、山岳カメラマンとしても本格的に活動。13年には三浦雄一郎氏の80歳でのエベレスト登頂を記録した。フィンランド人初の8000m峰全山登頂者ベйка・グスタフソンらを撮影し、海外メディアからも信頼を得てきた。ドローンの活用など、ユニークなアイデアの撮影方法などで新しい世界観を撮影している。

山で撮影をすることは、もうひとつの僕の生きていく道である。そこには自分しか撮ることのできない世界がある。そして、その世界をリアルに伝えることができる手段として、多くの登山家と同行し撮影している。すなわち、それが僕にしかできないサポートという方法でもあった。

15年の秋、日本山岳会極限追求型登山部門の助成金を得て、西ネパールのアピで予想外の冒険の末登頂し、それらを撮影した。

■禁断の南チベット

中村保名誉会員

中村保名誉会員は1934年、東京生まれ。一橋大学山岳部で先鋭登山を目指す。58年、石川島重工（現IHI）に入社し海外のビジネスに専心。90年〜2014年の四半世紀の間に中国南西辺境「ヒマラヤの東」に37回足を運び、地理的空白部の全容をほぼ解明する。

講演会では、「ブルースカイ・エクスペディション」と題し、昨年踏査した地域を多くの写真・地図を交えて紹介した。ラサの東に位置する未踏の郭格拉日居（ゴイカルラリグー）山群とヤルン・ツァンポー南岸の6000m峰の山塊を

ターゲットとし、中国・インドの実効的な国境であるマクマホン・ラインとブータン国境への接近を視野に入れた。

北京オリンピックとラサ暴動以降、東・南チベットへの外国人の入域は年々難しくなっている。統制・検閲が一段と厳しくなった。不確定な状況のなかで成果を収めることができたのは、チベット族ガイドの人脈、調査・交渉能力と機転のお陰だという。

状況は厳しく、4つの許可が必要で早めの手配にもかかわらず、最終的に許可証が航空便で届いたのは成都を発つ前日であった。

統制は異常だった。通過・滞在する県の公安には必ず出頭した。幹線道路沿いでは公安・警察のチェック・ポストで許可証を提示せねばならなかった。幹線道路では通行車のスピード・チェックが頻繁に行なわれていた。チベット族への締め付けが続くなかで、インフラ整備は急ピッチで進められている。中村名誉会員は、03年に第6回秩父宮記念山岳賞を受賞された。その記録は『ヒマラヤの東』『深い浸食の国』『最後の辺境』——チベットのアルプス』などにまと

められ、16年には110周年記念出版として『ヒマラヤの東——山岳地図帳』が刊行される。

(講演・報告会は、それぞれいただいたレジメを基に構成した。文・高橋重之、写真・奥田有恒)

平成27年度支部長会議 準会員制度導入を話し合う

毎年、年次晩餐会に先立って開催している支部長会議は、12月5日午前10時30分から晩餐会と同じ京王プラザホテルで開かれた。全国32支部から支部長が参加した。会務報告の後、吉川正幸副会長が準会員制度について再生委員会での検討結果を報告、これに基づいて意見交換した。

吉川副会長は「会員増強のため再生委員会の中に常務理事が参加するワーキング・グループをつくり、支部事業委員会などの意見を聞きながら、準会員制度案について検討を進めてきた。長期間検討してきたことであり、会の財政が悪化するばかりで待ったなしという状況である。来年の総会に諮り、速やかに発足させたい」と語った。

準会員は、検討案(4・1版)によると、具体的には①3年間以内
に正会員に移行しなければなら
ない②入会金は5000円、年会費
は6000円とする③会員総会での議決権はない④日本山岳会の各種行事(含晩餐会)に参加でき、山
行に原則として参加できる⑤会報
「山」は郵送し、「山岳」は有料とする——など。

定款での規定は最小限にとどめ、詳細は理事会で決定する規程で定める。その際、永年会員のほか終身、賛助、夫婦制度について合わせて変更を行なうこととする。永年会員の年会費については、実費相当額の6000円にすることに固まりつつある。

準会員制度に対する意見が支部から出された。若い人の入会を促すにはいい制度だと評価する意見が多かった。入会のネックになっている入会金・会費のハードルが下がる。

しかし、千葉、岐阜、石川、北海道、埼玉、宮城など、多くの支部が支部独自の会友制度を持っている。「会友が正会員に移行してほしいのだが、なかなか進まない」「居心地がいらいしく定住している」「そんな状況で「会友から準会員への移行は難しい」などと話された。逆コースを懸念する支部もあった。正会員だったのを退会し、会友になった例もあったという。これに対し、会友がすべて準会員に取って代らなければならないものではない。支部独自の制度は、支部の任意とすることが示された。

準会員の入会後の活動を支える「受け皿」をどうつくるか。正会員、準会員、会友の3つの会員の区別化をどう図るか。課題は多い。年内に最終案をつくり、1月の会報「山」で会員に周知、広く意見を求める考えだ。



記念式典の前に開催された全国支部長会議

Reports

UIAA総会2015韓国・ソウルで開催

中村 保

国際山岳連盟UIAA年次総会2015(今年は韓国・ソウルで10月21〜24日開催)に、JACC名誉会員の名目でオブザーバーとして参加しました。多くの友人に再会、意義深い3日間でした。総会には日山協から神崎忠男さん(前会長、現顧問)、八木原園明さん(現会長、小野寺齊さん(事務局長)が公式代表として出席しました。総会の議事については小生が報告紹介する立場にはありませんので、ここでは韓国の登山界に関連して個人的に強く受けた印象を紹介したいと思います。

Korean Alpine Federation = KAFの活動 National Mountain Museum、スーパードライマール Chang-Ho KIMさんについてです。

KAF(韓国山岳連盟)

韓国で近代アルピニズムが興ったのは1920年代で、いくつかのアルパイン・クラブが誕生し、そのうち1945年にKorean Alpine Clubがその中核となった。しか

し、朝鮮戦争の勃発で登山活動は中断を余儀なくされたが、戦後すぐ登山活動は復活し、1962年にKorean Alpine Federation(KAF)が創立された。KAFは1966年に教育省の認可と支援を受け、1970年にUIAAに参加した。1977年の韓国隊エベレスト初登頂を推進、1994年にアジア山岳連盟UIAAに創立と同時に参加した。1999年までに有力なアルパイン・クラブを集約し、2012年にはKorean Ski Mountaineering Associationを設立、さらに広範な活動を展開してきた。現在の会長は Injeong LEEさんである。

特筆すべきはChristine PAEさんのことである。KAFの国際関係を仕切る、有能で英語の堪能な女性である。UIAAの事務局長を務め、UIAAのアジア代表の一人でもある。今回のソウル総会でも、司会進行役としてそのタレントが如何なく発揮された。

NMM(ナショナル山岳博物館)

景勝地、雪岳山の麓に昨年11月にオープンした。日本では考えられないほど充実した施設である。韓国登山界の発展と意気込みが感じられる。写真をご覧いただきたい。3階建てにエキシビジョン・ホール、オールドトリウム、クライミング体験ルーム、インドア・クライミング・ホール、現代登山の歴史展示、韓国の登山文化紹介と多彩である。神崎忠男さん曰く「昨今の日本の登山界の状況では、日本にこんな立派な山岳博物館を造ることなど考えられない……」。

Chang Ho KIM

(韓国最強のクライマー)

ナショナル山岳博物館でのChang-Ho KIMの講演には圧倒された。8000m峰14座を登っただけでなく、彼の登山活動は精力的、独創的、広範囲、多彩で群を抜いている。恐らく世界で彼を凌駕するヒマラヤン・クライマーはいないのではないかと思う。現在は韓国山岳連盟のエクスペディション担当の理事で、同連盟は彼を厚遇している(講演の中で中村の東チベット踏査のことにも触れた



講演するChang Ho KIMさん

ことは驚きだった。

2013年5月20日、Chang-Ho KIMとパートナーは人力のみで海拔0mから世界最高峰の頂に到達した。これで44歳の韓国登山家は、無酸素で8000峰14座完登の偉業を成し遂げた。

0 to 8848プロジェクト(パートナー: Sung-Ho SEO 34歳) インド洋ベンガル湾〜コルカタ(カルカタ)……カヤック(156km)、コルカタ〜ネパール・トウムリントン……自転車(893km)、トウムリントン〜エベレストBC……トレック(162km)、無酸素でエベレスト登頂。インド



雪岳山麓にオープンしたナショナル山岳博物館

洋くエベレストBC(40日)エベレスト登攀(40日)
ポーランドの伝説的クライマー Jerzy Kukuczkaの8000峰14座完登の記録を「Chang-Ho KIM

は7年10ヶ月6日で達成し、38日間短縮した。しかし、不幸なことにパートナーのSung-Ho SEO(8000峰12座登頂)は下山中に翌朝、第4キャンプ(7600m)で息絶えて発見された。

Chang-Ho KIM의 登山記録
1993 - Great Trango Tower (6284m, Karakorum)
ascent
1996 - Gasherbrum IV (7925m, Karakorum)
east face new route attempted
2001 - Kllache Branga (5560m, Karakorum)
1st ascent
Honboro Peak (5500m, Karakorum)
1st ascent

ランタン谷復興支援シンポジウム

2015大なだれ——悲劇の実態と復興に向けて

＜プログラム＞

1. 「山が崩れ、村が埋もれた——ランタン谷 2015/04/25」
(兵頭 渉／大阪市立大山岳会OBランタン・リ遠征隊)
2. 「現地調査報告・ランタン村に何がおきたか？」
(藤田 耕史／ネパール・ランタン谷における雪氷土砂災害調査隊)
3. 「大なだれとゾモたち——民間でできる復興支援」
(貞兼 綾子／ランタンプラン)
4. 主要山岳6団体の募金状況と今後の取り組み
5. ディスカッション&質疑応答

日時 2016年1月10日(日) 13:00~17:00 (開場12:30)
場所 JICA国際会議場(JR市ヶ谷駅から徒歩10分、都営地下鉄市ヶ谷駅A1出口から徒歩10分、東京メトロ市ヶ谷駅6番出口から徒歩8分)

参加費 1,000円

主催 ランタンプラン

共催 ネパール・ランタン谷における雪氷土砂災害調査隊
2015年ネパール地震と地震災害に関する総合調査隊

後援 公益社団法人日本山岳協会ほか

Shikari (5924m, Hindu Kush) new route 1st ascent
2001 - 02 Solo expedition in Karakoram and Hindu Kush Ranges
2003 - Delhi Sang Sar (6225m, Pamir) solo 1st ascent
Atar Kor (6189m, Hindu-raji) 1st ascent
Haiz Kor (6105m, Hindu-raji) 1st ascent
2008 - Batura II (7762m, Karakoram) 1st ascent
2013 - Himjung (7126m, Nepal) 1st ascent Completed
14*8000m w/o oxygen
2005 - Nanga Parbat (8126m, Pakistan) Rupal face ascent
2008 - Batura II (7762m, Karakoram) 1st ascent
2013 - Himjung (7126m, Nepal) 1st ascent Completed
14*8000m w/o oxygen
2005 - Nanga Parbat (8126m, Pakistan) Rupal face ascent
2008 - Batura II (7762m, Karakoram) 1st ascent
2013 - Himjung (7126m, Nepal) 1st ascent Completed
14*8000m w/o oxygen

創立110周年記念ツアー報告

ブータン・ガンカー・プンスム大展望 トレッキング14日間

亀田広明

ガンカー・プンスム（7564m）は、ブータン北東部、中国との国境に位置し、首都のティンプーから北東へ距離にして約100km離れたルナナ地方にある。我々一行（ツアー実施IIアルパインツァーサービス）は、このガンカー・プンスムを間近に展望するために、ティンプーから登山スタートの玄関口ブムタンまで、3つの3000m以上の峠を越えて車で移動する。ブータンでは、このルートは幹線道路であり、舗装が施されているが、険しい断崖絶壁に拓かれたためか所々斜面から土砂がこぼれ、舗装が埋まってしまっている箇所や、また道路拡張工事を急ピッチに進めており、至る所でブルドーザーが道路工事に活躍し、何度も交通規制で足留めをされた。我々の山旅は、そんな長時間移動と悪路での左右上下への揺れと格闘しながら、ブムタンまでの道のりと奮闘するところから始まった。

さて、ガンカー・プンスム登山の歴

史は1973年、インド・ブータン合同隊による南面の試登から始まり、1986年の英国隊の南面からの試登までの14年間に5つの遠征隊が登山を試みている。しかし、いずれの隊も山頂に立つことはできず、その後、ブータン政府が信仰上の理由で登山許可を出さなくなったことから、現在も未踏のままで残っているのである。

ティンプーから1時間ほど車で走った所に観光地としても有名な展望地のドチュ峠があるが、ここからブータン・ヒマラヤが屏風のように一望でき、ひと際存在感を持つ巨大な山がガンカー・プンスムである。特にこの山の南東面の3kmほどの切れ落ちた巨大な壁と、東面へ連なるナイフリッジの尾根やヒマラヤ壁の壁は圧巻である。今回、我々のトレッキングは、その最も迫力のある南東面に接近するチャムカール谷を詰めていくルートである。このルートは、1985年にイヴォン・シュイナードな



チャムカール谷から見上げたガンカー・プンスム南東面

どアメリカの精鋭クライマーからなるナショナル・ジオグラフィック隊が当時、アプローチとして使用しており、彼らは南東壁直下まで至ったものの、この巨大な壁を眼前にしてあまりにも難攻不落の壁であると判断して、登山を断念している。

また、このチャムカール谷を訪れた外国人は極めて少なく、我々が調べた数々の文献記録からは、折り返しのパムルパ（4430m）まで日本人グループが入山した記録が残っていないルートでもある。つまり、日本人グループとしては今回、初めて我々が足を踏み入れ

ることとなる(ただし、ツアンパ付近までは、青いケシを探して日本人が訪れている記録がある)。

我々は、日本人グループとしては最初となるこのガンカープンスム南東面を間近に展望するコースに、不安と期待に胸を膨らませながらトレッキングをスタートした。

スタート地の標高2820mのナスフェル村から折り返しの標高4430mのバムルパまでの往復距離は、約100kmの道のりであり、1日の高所順応滞在日を含めて7泊8日で歩くこととなる。入山日は14km、2日目のツアンパ(3675m)までは16kmの行程であるが、この区間は樹林帯の中を沢沿いに歩く荒れたルートで、ゴロタ石と泥濘との格闘であった。現地に住むわずかな村人の往来くらいしかないのも、道は荒れていた。

また、両日とも小雨の中での登山であつたため、疲労度も増す。3日目は高所順応のためにツアンパで1日滞在し、4日目からゴルチャン(4180m)へ向けて登山を再開。しばらくは樹林帯の中を進むルートで展望は得られないが、標高4000m付近から急に谷が開け、目の前に我々を歓迎するよ

うにガンカープンスムが、遠望ではあるが姿を現した。間もなくして宿泊地のゴルチャンに到着。

翌朝、ゴルチャンのキャンプ地は、一面の雪景色に変わっていた。目の前に見えるはずのガンカープンスムも白い雲が覆いかぶさり、姿が見えない。それでも期待に胸を膨らませながら、最終キャンプ地のバムルパ(4430m)を目指す。さらに広々としてきた谷を進むと、次第に目の前のガンカープンスムに懸かっていた雲が取れ始め、全容を現した。この間、あつという間の出来事だった。突然現れたその山容は、昨日よりも一層間近に迫り、さらに大きくなつて存在感を増していた。メンバー全員が突然に現れたその山容に感動し、歓喜に沸いた。そこからバムルパまでの道のりは決して近くはなかったが、心が弾むような感動は、メンバーの歩行を軽快なものに変え、あつという間に折り返しのキャンプ地に到着した。

我々はその後、バムルパのキャンプ地の横に聳える斜面を4600m付近まで登り、間近に迫る未踏の世界最高峰を心ゆくまで堪能した。

Books

『日本百名山』英訳版をめぐって

大森久雄

深田久弥『日本百名山』の英訳版刊行はまことに喜ばしいことであった。同書の内容は本誌3月(838)号で紹介したが、それが機縁になって、訳者のマーチン・フッド Martin HOODさん(スイス・チューリッヒ在住)と連絡がつき、手紙やeメールでの交信が重なった。その過程で、日本に来る機会があったら当会で英訳版の話をしてみたらどうか、という申し出をしたところ快諾を得てそれが実現。10月16日に同氏と夫人の山田晴美さんを迎えての講演がおこなわれた。

当日、図書委員会の三好まき子委員長がJR市ヶ谷駅に迎えに行くと手筈になっていたが、予定時刻よりも早くに当会事務所入口に、にこやかな笑みを浮かべてフッド夫妻が姿を見せた。先手をとられた感じだったが、初対面の挨拶をすませてからは和やかな雰囲気になかで話が進んだ。事務局図書室担当の田村典子さんに案内してもらい、書庫に入る。望月達夫名誉会員寄贈のアルパイン・クラシック

スガ並ぶ書棚には眼を輝かせていたし、H・B・ド・ソシユールの『アルプスの旅』4巻(1779〜1796年刊)を手にして、「初めて見ました」と喜んでいた。

集会には、深田久弥山の文化館に関係する当会石川支部の大庭保夫会員など地方からの参加者や、予告が『山と溪谷』誌に掲載された関係か、当会会員以外の複数の参加者もあり、この種の集会での平均を上回る40名になった。

講演は三好委員長が進行役になり、パワーポイント使用の写真をスクリーンに映して始まった。タイトルは「Matterhorn VS. Mt Fuji」外国にも名山はありうるか?。日本の登山史がなめらかな日本語で語られ、小島島水や志賀重昂などの名前がイギリス人の口から流れ出てくるのは新鮮な印象だった。話には多岐にわたり、全体の紹介は本誌の枠内での分量を超えるので、フッドさんに再整理してもらい『山岳』2016年号に掲載する。ご期待いただきたい。

スクリーンに映された最後の写真は雲海の日没だったが、質疑応答のなかで、日本では日没よりも日の出が主役だが、ヨーロッパでは日没に焦点が当たる例が多い。レズリー・ステイーヴンの「モン・ブランの日没」など、という興味深い指摘が飯田年穂会員(明治大学教授)からあった。フッドさんも当然そのエッセイは知っていて、話題が高度な水準になったのはおもしろかった。

JAPANESE ALPINE NEWS

(当会の海外向け英文機関誌) 中村保編集長からは同誌に英訳版紹介掲載の説明があり、「その反響は?」という問いかけへの答えは「静かですね」。English gentlemanらしいユーモアだった。

終了後、『山と溪谷』誌副編集長の太田貴美子さんほか時間に余裕のある人が参加して、近くの店で夫妻と酒席を共にして歓談した。

イギリス山岳会の機関誌『THE ALPINE JOURNAL』2015年号には、英訳版紹介を兼ねて日本の登山文化を語るフッドさんのエッセイが掲載されている。「日本以外の国の人にとって、日本の山はblack holeだ。つい最近まで、英



J A Cルームで講演するM・フッド氏

語でなら日本アルプスのことを知るよりも東グリーンランドやヒマラヤ奥地の情報をとるほうがやさしかった」と書かれているが、日本の山に関する文章が世界最高の山岳誌に載るのは画期的なことである。そのエッセイは『日本百名山』の「御嶽」にある「この山の無尽蔵ぶりは、まだ大部分がアンカットの膨大な書物のようなものである。どのページを切っても、他のどの本にも書いてないことが見つかるだろう。そんな山である」を引いて「他のどの本にも書いてないことが見つかるだろう。そして誰もがもっと読みたいと期待する。Nihon Hyakumeizanはそんな本である」と結ばれている。

追

OBITUARY

悼



松浦輝夫氏を偲ぶ

平林克敏

11月6日昼にご逝去の連絡を受け、残念無念としか言いようがありませんでした。その顔は安らかで、衰えはありませんでした。家族に「ありがとう」と感謝の言葉を何度も残しての最期であったようです。

何事も熱心で、一貫した気骨の持ち主で、気概に満ち満ちた行動力は登山のみならず、ヒマラヤ登山の前から植物に興味を持ち、エベレスト登頂後は屋久島にこもり、



陶芸から蘭の栽培に至るまで実に多彩な趣味を極めるという集中した生き方でありました。私たちエベレスト隊員全員に感謝を込めて、それぞれに違った手作りの陶芸品を贈ってくれました。なんと粋な計らいであったことか。私たち山仲間、登山を通して知り得た彼の別な姿を、半世紀にわたり見続けたことになりました。

松浦君は、エベレスト登山のときもシェルパのピンジューを大変気にかけていました。彼は早大のローツェ・シャールで、8000mからの撤退のとき、行動を共にしたシェルパであったからです。私が2次隊でザイルを結ぶシェルパをチャタレーに決め、最高キャンプにいた彼にこの決定を伝えると「残念ですが、どうか彼を慰めてやってください」と言う。サウス・コルと最高キャンプのやり取りは「次の第3ステージで必ず彼を推挙すること」を約束して、私たちの

会話は終わりました。

松浦君と私の間では、生前に明らかにしておきたかった話題が一つ残っていました。それは「全隊員の土産に頂上の石を一つでも多く担いで帰るために、重たいムービー・カメラを頂上に置いてきた」と報道された彼の発言についてです。この発言は広く報道され、美談となって広がりしましたが、実際にはそのカメラは南峰の頂上に一夜放置され、私が手にしたときは、中身まで凍り付いて作動しませんでした。松浦君は「頂上の雪の中の方が暖かく、安全と考え頂上に置いてきた。植村が南峰まで持つて下ったのでは……」「いや、僕じゃないですよ。頂上の雪の中に置いておくなんて聞いていませんでした(笑)」と植村。事実は、南峰頂上の岩の上に、昔の英国隊の酸素ボンベの横に置かれていました。どちらが正しいのか、本当のところは不明のまま二人とも亡くなってしまういました。

エベレスト頂上に立っている写真が、ほかの約2000点と共に収納され、大阪城本丸の横に設置されることになりました(芸報「山」2000年12月号No.667参照)。関西にいた5人の隊員と来日中の2人のシェルパが万博会場に招待され、タイムカプセルの主宰者である松下館のほか、ネパール館に頂上の石を寄贈しました。このとき、律義な彼は「やつと役目が果たせた」と安堵の様子でした。

早稲田大学のローツェ・シャールと、隊長を務めたK2の登山は、彼の威信をかけた8000m峰であったと言えましょう。この2つの登山とエベレスト登頂で培われた彼の山に対する姿勢は、日本登山界に残る大きな実績として語り継がれていくこととなります。

すでに鬼籍に入った17名のエベレスト隊員や、山に散った仲間と共に泉下で楽しい山を語り合ってください。ご冥福をお祈りし、寂寥新たであります。さようなら

【松浦輝夫会員プロフィール】

11月6日、大阪市内の病院で白血病、肺炎のため死去。享年81。会員番号5107。1965年、早大ローツェ・シャール登山隊。1967年、日本山岳会エベレスト登山隊で植村直己さん(故人)と共に日本人初登頂。1981年、早大K2登山隊で西嶺からの初登攀を指揮。

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です。

自然保護委員会

自然観察会

長野県大鹿村のリニア 中央新幹線予定地を見る

リニア中央新幹線。夢の超特急
ともてはやされ、東京と名古屋を
結ぶ新しい交通システムとして期
待する人も多いと聞く。

そのルートの一部が南アルプス
の中央部をトンネルでぶち抜き、
山梨県と長野県を結ぶことになっ
ている。しかし、南アルプスは手
つかずの自然の宝庫である。これ
だけ高く広大な山域で人の手が入
らない原始の自然が息づいている
所は、ほかにないだろう。

南アルプスを貫くりニア中央新
幹線のトンネルは当然、その大自
然に大きなダメージを与えること
になる。自然をはぐくむ豊かな水
系が枯渇の危機に瀕するのはもち

ろん、工事が出た残土は日本アル
プスを代表する仙境を埋め尽くし
てしまう。

その現場を見て皆で勉強し、議
論しよう。そんな企画が8月下旬
に大鹿村在住の佐藤明穂会員の案
内で行なわれることになった。

8月29日の昼、奥深い山間にあ
る大鹿村役場の駐車場に集合した
あと、まずは秋葉街道の下をリニ
アのトンネルが通る予定地を視察。
静けさが心地よい場所だけに工事
の影響が心配である。

次は小さな村営の博物館、中央
構造線博物館に向かう。説明は学
芸員の河本氏。中央構造線と周囲
の地質、さらにリニア中央新幹線
に話が及ぶ。この場所にトンネル
を掘ることによって自然環境を破
壊されるのか、造山活動の真つた
だ中にある南アルプスを掘ること
がどれだけの危険を生むのか。そ
の解説には熱がこもっていた。

その晩の宿は佐藤会員が運営し
ている延齢草。廃校となった小学
校の一部を大河原の高台に移築し
た宿泊体験施設である。

夕食にはゲストとして佐藤会員
の義父・小林俊夫さんが参加し、
リニア中央新幹線工事が大鹿村の
人々の生活にいかん深刻な影響を
与えるかを語ってくれた。

日が明けて8月30日。この日は
リニア中央新幹線のトンネルがそ
の真下を通る小河内沢の一部を小
林さんの案内で遡る予定だったが、
雨が降っていたので、トンネル工
事で大きな影響を受けることにな
る集落・釜沢と、その近くにある
試掘坑の跡を視察した。

まずは釜沢で自治会長のサイモ
ン・ビゴットさんの話を聞き、試
掘坑跡を見る。さらに小渋川沿い
の残土集積予定地を訪れた。

たった2日の間だったが、リニ
ア中央新幹線の工事が南アルプス
の自然環境にもたらす影響はもち
ろん、そこに住む人々の生活にど
れだけ大きなダメージを与えるの
か。直接見て聞くことができたの
は得難い収穫だった。

今後は自然保護委員会として、
このプロジェクトに対して、どの

ようなアクションを取るか考えて
いく必要がある。そのため
の大きなヒントを与えてくれた2
日だった。
(委員・近藤雅幸)

山行委員会

南アルプス仙丈ヶ岳・北 岳縦走(嶺朋ルート下降)

10月1〜5日、南アルプス縦走
シリーズ第3回は、ポーコン沢の
頭から地図に記載のない嶺朋ルー
トを広河原に下った。

参加者は、千葉支部／吉永英明
(73)、埼玉支部／菊池武昭(73 C
L)、清登緑郎(64)、宮川美智子
(65)、田中摩利子(50)、北海道支
部／一鐵巖(75)、常本良一(70)、銭
亀美佐子(65)、助田梨枝子(69)、大
畑博子(73)、信濃支部 中坪皓
(70)、会員外1名の12名。

10月1日(木)雨、JR飯田線・伊
那市駅改札口に集合。直ちに送迎
バスで仙流荘へ。

2日(金)、昨夜来の大雨で南ア
ルプス林道の開通が遅れ、菊池武
昭リーダーの判断で丹溪新道を北
沢峠からのメインルートに変更し
た。登るに従い靑空が顔を出す。小
仙丈ヶ岳から北に鋸岳、甲斐駒ヶ

岳、南に仙丈ヶ岳、北岳、南アの名峰がずらりと。今夜は仙丈小屋泊。今日のアルバイトは4時間30分。

3日(土)、朝焼け、雲海、山に登る者だけに与えられた特権。6時30分出発、20分ほどで仙丈ヶ岳(3033m)。大仙丈ヶ岳(2975m)、伊那荒倉岳(2517m)へとアップダウンを繰り返して500mほど高度を下げる。この尾根を仙塩尾根という。独標(2499m)、横川岳(2478m)を通過。ナナカマドの熟した赤い実にピントを合わせ背景の甲斐駒ヶ岳をぼかしてパチリ。天気の良い日はこんな遊びもいい。12時54分、野呂川越着。今日の泊まりは両俣小屋名物おかみとネコが我々を待っていた。今日のアルバイト7時間。

4日(日)、晴天。6時出発。1時間ほどで野呂川越へ登り返す。木漏れ日が原生林に射し込み気持ち良い。しばらく樹林帯を行く。地図上の2699m付近から尾根は細くなり岩場を登る。悪場には鎖がセットしてある。三峰岳が目の前だがなかなか着かない。3つほどピークを越し、11時5分やつと三峰岳分岐に着いた。ここは大井川の原流域だ。山頂(2999m)はここから5分、塩見岳や、南ア南部の山々が。来年は塩見岳を中心にとリクエストが上がった。ガラ場を行くようになる。12時45分、間ノ岳(3190m)、北岳が大分近づいてきた。中白峰(3055m)を経て14時55分、今日の泊まり北岳山荘に着いた。今日のアルバイトはおよそ9時間。

5日(日)、強風ガス。6時出発。八本歯への分岐にザックをデポし北岳へ。7時23分、山頂(3193m)、一面のガスで視界はない。山頂での写真が登頂の証しだ。8時10分、分岐でザックを拾い八本歯のホルヘトラバースする。北岳バットレスを背に岩稜を八本歯の頭へ。天気も良くなり、開放された穏やかな山稜を10時20分、ポーン沢の頭に着いた。ここで常本さんが伊那から担いできたナシが出た。ぐい。

嶺朋ルートはここから北へ90度、広河原に落ちる尾根を下る。下降点に標識があるので間違えることはない。ハイマツ漕ぎ、岩場、樹林帯の急坂、赤ペンキがルートを指示してくれる。すってんころりん、15時23分、広河原に降り立つた。今日のアルバイトおよそ9時間30分。

好天に恵まれ、事故もなく無事全日程を終了した。嶺朋ルートは北岳の隠れた登・下降路だ。菊池武昭リーダーの先導に感謝したい。(信濃支部・中坪皓)

三水会

三水会、創立40周年迎える―記念祝賀会に62人参加―

日本山岳会三水会は今年、創立40周年を迎え10月21日、記念祝賀会を東京・芝公園のホテル・メルパルク東京で開催した。来賓として出席した小林政志日本山岳会会長から「JACCの歴史と並走した40年に敬意を表し感謝する」と、また森武昭前会長から「JACCの基本理念はクラブイズムである。会の止まり木として、さらなる活躍を願う」と、励ましの言葉をいただいた。

水会」として発足した。創立40年、その前を入れると実質56年となる。当時、同好会という組織は存在しなかった。それ故に最も古い同好会といわれている。

サロン・アルプニズムを掲げてきた。単に山に登るのが目的ではなく、互いに経験・知識を語り合う交流・親睦の場を持つことを会の目的としてきた。

懇談会はいつも楽しく感激した

懇談会を脈々と続けている。講師をお招きしてルームでお話いただくことが中心となる。発足以来40年間で622回の月例集会を開いた。講師は三水会内部のほか、JACC会員にお願いしている。話題は実に広い。日本山岳会の人材の豊富なことを改めて知ることになる。終了後、講師・会員同士の懇親会を持つ。いつも楽しく、かつ感激させられる。講師の皆さんに改めて御礼を申し上げたい。

山行が全くないわけではない。現地集会和称し、年3〜4回は山行を行なってきた。このほか若手を中心に月1回の「武四会」山行も20年続けた。やはり山好きの集まりだ。山行は合せて400回近くになっただろう。『四十周年記



祝辞を述べる小林会長

念誌』を作成した。そのなかで多くの会員が山行の思い出を寄稿した。残念ながら会員の減少と高齢化に悩まされている。会員は10年前には180人、5年前は150人、現在は100人ぎりぎりだ。復興には、大きなエネルギーを必要とするが、懇談会は継続したい。JACの豊富な人材と触れ合うことのできる場、会員の止まり木としての機能を活性化したい。

記念祝賀会には62人が参加した。久しぶりの顔が多い。参加会員のフルート演奏を楽しみ、昔話は尽きなかった。週末には、富士五湖周辺の鉄砲木ノ頭・高指山で記念山行を実施した。

(文・高橋重之、写真・小泉義彦)

アルパインスケッチクラブ

四姑娘山スケッチ山行

アルパインスケッチクラブは、創立25周年記念事業として7月3～12日に中国・四姑娘山へスケッチ山行を会員11名で実施しました。

四姑娘山の雪山をバックにブルーポピーのスケッチを目的にし、体調が良ければ大姑娘山(5025m)の登頂を目指しました。

7月3日(金)に成田から成都に入り、翌日、成都からバスは高速道路で山岳部の被害の大きかった四川大地震の震源地を抜け、少数民族チベット族の町・日隆まで移動。予定していた道路の損害で迂回したために14時間を要しました。日隆の日月山荘はチベット建築の宿で、海拔が3150m。エレベーターがないので荷物を3階まで運び上げるのがひと苦労でした。

3日目の7月5日には、高度順化を目的に宿の近くから専用バスで長坪溝にハイキング。4日目の7月6日は、日隆から大姑娘山のBCまでのトレッキング。300mほどの尾根に取り付き、その尾根の上に出ると眼前に白く雪を頂く四姑娘山・大姑娘山までの4つの頂が見えました。梅雨の季節に訪れて山が見えるか心配していたが、安心しました。さっそく四姑

娘山パノラマのスケッチを開始。

登山道は大姑娘山のBCまで尾根の中腹をトラバースで、急な登りはなく、次々に現れる新しい高山植物を楽しみながら高度を上げていきました。16時30分、100mほど下に開けた海拔3600mの草原に我々のテント村が見下ろせます。ヒイラギ林を降りるとサクラソウ、シオガマギクなどが咲き乱れる草地に16時45分到着。5日目は休養をし、近くでスケッチ。

6日目、7月8日(月)は曇天。今日は4350mのACへ。高度差750mの登りがあり、海拔が高いこともあり皆も疲れが出ていますが、豊富な高山植物を見ながらゆつくり登りました。4000m付近から草丈約15cmの青いケシのメコノプシス・グランデイスが現れ、AC付近(4200m)から葉や花に鋭いとげを有するメコノプシス・ホリドゥーラ(草丈20cm)が数株見つかり、その後テント場周辺にたくさん見ることができました。黄色のメコノプシス・インテグリフォリアも見られ、皆さん大感激。写真やスケッチに熱中してやっと15時5分にテント場に到着しました。今回のトレッキングの

目的であるブルーポピーが見られ、白く雪を頂く四姑娘山群のスケッチもできたので、記念山行の大きな目標を達成しました。翌朝は10cmの積雪で滑りやすく、大姑娘山の登頂は中止。

8日目の7月10日(月)は晴れ。BCから日隆に下山。

*4つの姑娘山や高山植物群のスケッチは、2016年2月21～27日まで開催される、当クラブ恒例の「山好きの山の絵展」(有楽町の交通会館)で展示されますので、ぜひご来場下さい。(富樫信樹)

第32回全国支部懇談会(越後支部主催)コース等の変更について

越後支部主催の支部懇談会内容で一部変更があります。

講演者＝辰野康之氏から石澤進氏(元新潟大学理学部教授)に変更。演題は「弥彦連山の植物」親睦登山Ⅱ《Aコース》多宝山からの下山路は、天神山・丸小山公園車で宿に送迎に変更《Cコース》大平山公園から直接弥彦山を往復し、(車で宿に送迎)に変更。問合せ先 事務局・小山一夫

FAX 025-265-4417

携帯 090-5219-7432

✉ koyama21825@yahoo.co.jp

支部

だより

全国各地の支部から、
それぞれの活動状況を、
北から南へとリポート
します。

北海道支部

東北・北海道地区集会を 札幌で開催

東北6支部と北海道支部で構成する「東北・北海道地区集会」が9月12～13日に札幌の定山溪温泉で開催。今回は北海道支部が主催で、北海道支部創立50周年記念事業の行事を兼ね札幌の定山溪ユ



地区集会に集まった会員たち

ーホテルに五十余名が参集した。東北各支部および北海道支部会員の交流を目的とした地区集会は今回で31回目を迎えるが、北海道支部が参入したのは第18回(2002年)からであり、2001年の東北地区集会にオブザーバーとして参加した支部長と事務局長が東北各県との連携の必要性を述べ、東北各支部の承認を得て翌年から「東北・北海道地区集会」となって北海道支部も参加することになったものである。

午後2時から支部長連絡会議を開催、各支部の活動と来年・再来年の開催候補地など今後の協力を確認。続いて全員参加の地区集会に移行。参加各支部の活動と紹介、次年度開催支部の挨拶、そして、記念講演として北海道大学地球環境科学研究所の工藤岳助教が「北海道の高山植物と高山生態系について」と題した講演を行なう。日本の

山岳地帯は世界有数の豪雪・強風地域であり、積雪期の季節バランスにより維持されている高山生態系は、地球温暖化により深刻な影響を受けつつあるという、スライドを駆使した講演は参加者の共感を得、各支部の実情を基にした熱い質疑が相次ぎ、時間をオーバーしての盛り上がりであった。

入浴後、会場を移して懇親会に入ったが、日本山岳会と言いながら会員同士の交流はなかなかできないのが現実で、このような集会に参加して初めて顔を合わせる会員とお互いの地域の山岳談義に花を咲かせ、酔うほどにお国訛りの言葉で語り合い、一層会員の絆を強めることになった。持ち込まれた数々のお国自慢の銘酒がすべて空になるなど、さすが東北は酒豪だけに強い。

翌13日は札幌近郊の札幌岳と喜茂別岳で交流登山の予定であったが、深夜から降り出した強い雨は朝になっても止まず、残念ながら中止となった。朝食後、解散式を行なって地区集会の日程を終えた。

(京極紘二)

宮崎支部

宮崎支部創立30周年記念 式典・九州5支部集会開催

宮崎支部では、平成27年7月11日、宮崎県高千穂町所在の「ホテル高千穂」において、JAC本部吉川正幸副会長、高千穂町町長内倉信吾氏以下来賓10名、日本山岳会からは、福島、東京多摩、千葉、東海、関西、京都・滋賀、山陰、広島、九州5支部会員会友113名が集い、宮崎支部創立30周年記念式典、並びに九州5支部集会を開催した。

開会に先立って、国の重要無形文化財に指定されている高千穂神楽を地元の天岩戸神楽保存会より奉納され、参加者を神話の世界に誘い、厳粛のうちに開会の運びとなった。

式典では、末永宮崎支部長の式辞に続き、吉川JAC副会長、内倉高千穂町長からご祝辞をいただいた。その後、九州5支部集会に移り、九州5支部の各支部長より支部の実態・支部活動の状況および課題等の報告がされた。

記念講演は、高千穂神社宮司・後藤俊彦先生により「山と歴史と信仰と」の題で、山岳信仰の歴史的背景と人々に与えた影響等について講演がなされ、悠久のロマンと感動の話に参加者全員が熱心に聞き入っていた。

その後、吉川副会長以下8名による鏡開きにより祝賀会の開宴となったが、始めに正調刈千切唄日本一に輝いた地元在住の興梠則夫氏による高千穂民謡「刈千切唄」などが披露された。哀愁のこもった力強い歌声は、参加者全員を魅了するとともに「神話のふるさとみやざき」のキャッチフレーズを強く印象付け、大喝采を受けた。



式典での鏡開き

続くアトラクションでは宮崎支部「高天原合唱団？」による古代衣装をまとった「思い出のスカイライン」や「ひよっとこ踊り」の熱唱熱演。各支部からはご当地ならではの特色豊かな出し物が披露され、大に盛り上がりを見せた。

翌7月12日は、地元の信仰の山「二上山」(男岳1082m、女岳980m)への記念登山を計画していたが、台風10号接近による悪天候のため中止を余儀なくされた。このため、全員バスによる高千穂町内の観光となり、神話と伝説にまつわる岩戸神社、高千穂神社、高千穂狭等を観光して回ったが、雲海で有名な最終目的地の「国見ヶ丘」に到着すると雨も上がり、眼下に神話の里が一望できるなど、神々も日本山岳会一行の来訪を歓迎してくれているかのようであった。

最後に、宮崎支部では、今回の支部創立30周年に当たり「神話のふるさとみやざき」に因んで、古事記ゆかりのある宮崎の山30座を選定し、支部会員が直接踏査、調査、

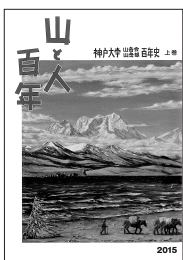
聞いて取りなどでまとめた記念誌『神々の山を巡る』を刊行した。会員の皆様に、日向神話ゆかりの山々の、悠久のロマンを探索する上での一助として活用していただければ幸いである。

(中森修二)



図書紹介

神戸大学山岳会・山岳部編
神戸大学山岳部・山岳会百年史
山と人 百年(上・下)



2015年7月
神戸大学山岳会・山岳部刊
B5判 上352頁 下456頁
定価 5000円
(上下組/税・送料込み)

神戸大学山岳部から創部100年の記念事業の一環として『山と人百年』の記念誌上・下巻の大作が刊行された。

上巻「百年の山」、下巻「百年の人」とする2分冊である。人と山と

の限らない関わり合いを上手に編纂していることが、この記念誌の特長と言えよう。

高商、工専、姫高、師範が戦後後の各校山岳部の伝統を受け継ぎながら、紆余曲折を経て新制大学に至る経緯は、ほかの新制大学山岳部に見られる多くの統合形態と同一である。明治以降の日本の伝統校(大学)が、それぞれ歩んできた登山と対比しながら考査できる一冊として参考となろう。

旧制各学校のOB会を合併しながら将来に備えた「人(リーダー)」

の達見が、その後の山岳部の伝統と実績を築いてきたことをこの記念誌から読み取ることができる。

下巻「百年の人」の項では、日本の山岳界にその名を知られ、登山界をリード・牽引してきた方々。神戸高商時代から山岳部長を務めた氷河学者や文化論的な視点から人と山との哲学的な関わり合いを示唆した部長、海外遠征のあり方に学術調査と併行させる必要性を説いた人など、多様で豊かな指導者に恵まれてきた。このことを山岳界全体が共有していたことが、この記念誌の随所から知ることができる。

また、上巻「百年の山」で語られる海外登山では、当時、日本で始まった初動の台湾遠征に因んで実施した1次2次の南湖大山遠征をスタートにパタゴニア、アンデス、アラスカからヒマラヤ遠征へと拡大。学術調査や他国との合同登山を含め、カラコルムのシュルピ・カンリ、チベットのクーラ・カンリ、ロプチン峰など、初登頂を成し遂げてきた。さらに今年も引き続き100周年記念事業として、チベットに向け合同登山隊を派遣中である。この行動の背後にある

「未知への挑戦」を原点に、飽くことなく求め続けてきた神戸大の思想とその行動が記念誌の中に色濃く語られている。

神戸大学は伝統的に南米研究の盛んな大学である。との某氏の見解は、実践を積み重ねてきた初期のころからの神戸大の姿を見つめてきた賢者の一言だが、そのころから進化し続け、発展してきた今日までの足跡は、「山と人」の表題が示すごとく、人の行動の哲学的側面と世界観を共有しながら、向後100年を担う若者に引き継がれていくものと期待している。

(平林克敏)

村中征也著
白く高き山々へ 六十歳からの青春―アルプス登山と語学留学の奨め



2015年8月
ナカニシヤ出版刊
A5判 304頁
定価 1500円＋税

元銀行員だった著者が還暦を間近に始めたアルプス登山の記録と、それをきっかけとしたドイツ語留学、アルプホルンのエピソードを

語る。著者の村中氏は日本山岳会会員で東海支部に所属、支部友会の活性化に尽力された。その縁で尾上元会長が「出版に寄せて」の一文を寄せて、第二の人生という言葉があるが、著者の活動のさまは「第二の人生を如何に充実して楽しく過ごすかを示すお手本である」と記している。

著者の登山活動の中心はスイス・アルプス。マッターホルンをはじめ、モンテ・ローザ、ユングフラウ、メンヒ、ダン・ブランシュ、そしてモン・ブランなど4000m峰22座を含めて30ほどのピークに登っている。ちなみに、アルプスの4000m以上のピークの数は、国際登山協会連合の公認では82となっているが、百名山のノリでこれを全部登るのはなかなか困難だ。パトリック・ペローは82日間で全踏破をくだで66までいったが、著者も登ったドームに向かう途中で滑落死している。登山を始めた者にとって本場のアルプスは魅力的だ。とはいえ、すぐに出かけるにはそれなりの障害を伴うのも確かだ、著者はそうした現実に対して一步を踏み出す勇氣を与えようとしている。

著者の特徴は、ガイド登山と語学の効用を推奨している点だろう。著者は主に現地ガイドと組んで登っているが、ガイドとしての信頼感のもとより、現地の人と付き合い合うことでコミュニケーションの幅が一気に拡大する。馴染みのガイドから始まった交流の輪が広がっていくさまを読むのは、まことに楽しい。

だが、それには語学が必要だと著者は言う。そこで、筆者はドイツ語を学ぶため、齢六十を迎えた年、一念発起して語学留学を果たすのである。これまた若い留学生

に交じって、負けず劣らず実に積極的な姿勢で学習に取り組んでいる。さらには、アルプホルンの魅力に取り憑かれると、演奏だけでなく、一気にその製作にまでめり込んでいく。自作の楽器を携えて各地を演奏旅行して回る活動性には、目を見張るものがある。これらを通して貫かれていたのは、飽くなきチャレンジ精神だろう。

それが、まさに還暦の青春を謳歌する姿を生み出し、その様子が生き生きと綴られているのが本書だ。

著者は関連情報を豊富に提供することで、本書が「アルプス登山の参考書として」も読まれることを期待している。ただそうなること、地名や施設の表記が一般に普及しているものと違ったり、知識としてはやや正確さを欠くところもあるので、読む際には注意が必要となろう。

(飯田年穂)



私の中の深田久弥

滝本幸夫著

『日本百名山』以降の北の山紀行



2015年10月
柏嶋舎刊
B6判 237頁
定価 1400円+税

本書は、前北海道支部長の滝本幸夫氏の、50年間にわたる深田久弥との交流を、往復書簡や写真などの資料を基に描いた本です。副題に「日本百名山」以降の北の山紀行」とあるように、1964年の『日本百名山』発刊以降について書かれたものです。

著者は、1965年に深田久弥の推薦で日本山岳会に入会しました。深田久弥は、この年のニペソツ登山を皮切りに、暑寒別岳(67年)、石狩岳(68年)など北海道の山に集中的に登りましたが、そこには「百名山で選ばれなかった北の山々へぜひ!」という著者の強い勧めがありました。

そして、深田久弥の来道と並行するように、いったん途切れていた北海道支部創立の動きが加速し、今年(2015年)北海道支部は創

立50周年を迎えることができました。それと前後して昨年、深田久弥『日本百名山』もその発刊50周年を記念して、加賀市の生家近くの大聖寺錦城山に記念碑が建てられました。

今年6月、著者の滝本氏はその大聖寺にある「深田久弥 山の文化館」で「北の山の歴史」と題する講演を行いました。翌日「白山に登らずして深田久弥は語れない」という思いを抱いていた著者は、山の文化館のスタッフや日本山岳会石川支部のメンバーとともに、念願の白山に登頂しました。そのときの様子は本書の中の「白山に登る」の章に描かれています。長年の思いを叶えることができた、という著者の充足感が読者にも伝わります。著者は「あとがき」で、「本書が世に出たのは偶然の産物であるかのように思っていたが、決してそのようなことではないと、今、最後の章を書いていて感じた」と記されています。本書は、著者の入魂の一冊として、必然の産物だったのです。

著者は、これまで『日高の風—孤高の山岳画家・坂本直行の生涯』(2006年 中札内美術村)、

『田中澄江が歩いた北海道の山』(2013年 北海道新聞社)など、北海道ゆかりの人々との交流を綴った著作を全国に向けて発信してきました。

また、これより少し前に『北の山・記録と案内』(初版は1972年、山と溪谷社。改訂版は83年、岳(ヌプリ)書房)を出版しました。この本の初版出版の前年、71年3月に茅ヶ岳で夫を亡くした夫人志げ子さんが「滝本さんと夫・深田久弥」と題する序文を寄せています。本書にも再録されていますが、志げ子夫人はそこで「一つ一つの山の歴史と現況を綯(な)い交ぜて簡潔な筆致で綴る滝本さんの『北の山』に一派『日本百名山』に通う精神」があると書かれています。夫を亡くして間もない夫人には、この『北の山』という本が強く印象に残ったのでしょう。前記のように今年(15年)6月「深田久弥 山の文化館」で行なわれた著者の講演のタイトルも「北の山の歴史」でした。

本書は、深田久弥の『日本百名山』発刊50周年記念碑、著者の日本山岳会入会の50年、深田久弥と登ったニペソツ登山の50周年、北海

道支部の創立50周年などいくつもの50年の歴史が(縞)ない交ぜになった「北の山の歴史」を、全国に向けて発信した記念の本と言っているかもしれません。(板垣望)

廣澤和嘉／児平隆一著

日帰り しずおか低山ウォーク

Best 20



2015年5月 静岡新聞社刊
B5判 127頁
定価 1350円＋税

静岡県の山といったらまず富士山。間ノ岳から南の南アルプス。思い浮かぶのはそんな山々だろう。日本一の山と3000m峰8座。日本の県でこれだけ高山に恵まれた所はほかに長野県と山梨県しかない。

ただ、ほかの2つの県には残念ながら海がない。いわば静岡県は山にも海にも恵まれた、日本で一番幸せな県なのである。それだけではない。数多の名湯、風光明媚なスポット。何よりも暖かく、陽光にあふれていて、住みやすい。グルメだって、うなぎ、しらす、桜えび、静岡茶。それにしずくかおで

んや富士宮焼きそば。浜松も餃子の街である。

これだけでも十分なのに、静岡県は日帰りで歩ける低山にも恵まれているのである。しかも、それらの山にはめったに雪が降らないから、一年中冬山の技術や装備なしで歩くことができる。さらに富士山が見えるというのも忘れてはいけない魅力である。日本百名山にも名を連ねる天城山(万二郎岳)をはじめとして、県内至る所にそんな山があるのだから、低山ウォークを愛好するハイカーにはたまったものではない。

そんな静岡県の低山を紹介するガイドがこのたび出版された『日帰り しずおか低山ウォーク Best 20』である。著者は日本山岳会会員の廣澤和嘉氏と児平隆一氏。静岡県の山を知り尽くしたベテランである。

本書を開いてまず感じるのが、まるで静岡県の気候の良さをアピールしているような明るさ。どのページも写真がふんだんに使われ、しかもそれが押しなべて明るい色合いに満ちている。

記事の内容もその山の魅力をあますことなく伝えていて、著者が

いかにこれらの山を知り尽くしているのかがよく分かる。欲を言えば公共交通機関の情報がないのが少し寂しいが、今の時代は山に車で行くのが当たり前になっているのだから仕方がないだろう。もちろん、立ち寄りスポットや蘊蓄の紹介も忘れていない。

本書は神奈川、東京、山梨、愛知のハイカーにこそ手に取ってもらいたい。これまで足を延ばしたことがなかった人でも、本書を開くことで静岡の低山の魅力がきつと感じ取れるはずに違いない。

本書はやや大きめのサイズ(B5判)だが、ムック調で手軽な本なのでザックに忍ばせて持つていくこともできる。そして、秋から冬の季節、澄み切った青空の下、雪をまとった富士山を眺めながら山歩き。春から初夏にかけては石楠花(シヤクナゲ)、満天星(ドウダン)をはじめとする花を愛でるハイキング。本書を手には、静岡の低山を歩いてみることをお勧めしたい。

(近藤雅幸)

図書受入報告(2015年11月)

著者	書名	頁/サイズ	発行者	発行年	寄贈/購入別
開成山岳部(編)	ケルン : 開成山岳部 創立100周年記念号	203p/26cm	開成山岳部OB会	2015	発行者寄贈
内田陽一	群青の空の下 : アルプスに恋して44座	222p/21cm	茗溪堂	2015	著者寄贈
木下喜代男	飛騨の山とある日 : 飛騨の峠道・飛騨の登山史・飛騨の山スキールート20選	430p/22cm	木下喜代男(私家版)	2015	著者寄贈
近藤信行	安曇野のナチュラリスト 田淵行男	415p/20cm	山と溪谷社	2015	出版社寄贈
やぎた晴	山小町 恋 (Yamaakei Creative Selection Frontier Books)	224p/19cm	山と溪谷社	2014	著者寄贈
名古屋山岳会(編)	名古屋山岳会々史 : 戦前編(1935年~1945年)	359p/26cm	名古屋山岳会	2015	発行者寄贈
名古屋山岳会(編)	名古屋山岳会々史 : 戦後編(1945年~2015年)	330p/26cm	名古屋山岳会	2015	発行者寄贈
名古屋山岳会(編)	名古屋山岳会々史 : 資料編	344p/26cm	名古屋山岳会	2015	発行者寄贈
南川金一	続 山頂渉猟 : 知られざる山・道なき山の記録	268p/21cm	白山書房	2015	著者寄贈
大森雅宏(編)	山嶽寮 : 甲南山岳会通信 No.70	102p/26cm	甲南山岳部・山岳会	2015	発行者寄贈

Climbing&Medicine・70**山と湯めぐり(1) 箱根の温泉**

村上和子



仙石原温泉に近い金時山

山と湯めぐりはいかがですか？ その湯めぐりを、首都圏から近い箱根の山を例にして考えてみたいと思います。

箱根には約1000m前後の山が密集しています。登山と言うよりハイキング色が濃いです。が、“ついでに温泉！”という贅沢を必ず味わうことができます。

箱根の温泉は有名ですが、ことの始まりは江戸時代後期。一夜湯治がブームになり、当時箱根にあった7つの温泉が、箱根七湯と言われるようになり、現在では箱根十七湯になりました。その一部をご紹介しますと思います。

明神ヶ岳・明星ヶ岳コースでは、強羅温泉、宮城野温泉があります。この2つの温泉は箱根十七湯に入っている温泉です。泉質は単純温

泉、塩化物泉、炭酸水素塩泉などです。

単純温泉とは、名前は単純とありますが成分は単純ではなく、肌に刺激がなく万人向きです。天下の名湯と言われている温泉には、実はこの単純温泉が多いのです。効能については筋肉痛、関節痛などの運動器官の症状、疲労回復、病後の回復などが挙げられます。

次に塩化物泉ですが、温まりの湯・殺菌作用の傷の湯と言えるようです。適用症としては、切り傷・冷え性・皮膚乾燥症などが挙げられます。

そして炭酸水素塩泉ですが、“美肌の湯”と言われています。肌の古い角質を落としてくれるからです。ほかには慢性皮膚病、切り傷、皮膚乾燥症などが適用症として挙げられています。

次に金時山コースの温泉に、十七湯の1つの仙石原温泉があります。硫酸塩泉、単純(硫黄)泉が主な泉質となります。

この2つの泉質に共通する効果は殺菌作用であり、慢性皮膚病に良いとされています。もちろん、筋肉痛や疲労回復にも有効です。また、硫酸塩泉は傷の湯とも言われています。

駆け足で“箱根湯めぐり”考えてみました。一層の健康増進にお役に立てれば幸いです。



仙石原温泉の浴槽

なお、過去のコラムは次の手順でご覧になれます。ご活用ください。

日本山岳会ホームページ→日本山岳会の活動案内→委員会→医療委員会 <http://jac.or.jp/info/iinkai/iinkai.html>



平成27年度第7回(11月度)理事会 議事録

日時 平成27年11月10日(火)19時00分～21時20分

場所 集会室

【出席者】小林会長、吉川・山田各副会長、神長・佐藤各常務理事、勝山・中山・野口・大槻・落合・直江・星・谷内各理事、平井・重廣各監事(神長常務理事は所用のため報告事項2まで欠席)

【欠席者】大久保副会長・山賀理事

【審議事項】

1・「支部に関する規程」の改正について(佐藤)

会員の支部所属関係の不整合を是正するため「支部に関する規定」の変更とそれに伴う届出様式の変更について別添資料により審議した。(賛成12名、反対なしで承認)

2・平成28年度の支部事業助成金

等及び新入会員報奨金について(吉川)

連続する経常赤字解消策として、平成28年度の予算における支部事業助成金の減額について別添資料により審議した。(賛成12名、反対なしで承認)

3・入会希望者承認について

15名の入会について別添資料により審議した。(賛成13名、反対なしで承認)

【協議事項】

1・平成27年度支部長会議の開催について(佐藤)

12月5日(土)開催の支部長会議の議事内容について協議した。

【報告事項】

1・水越武写真展「真昼の星」への名義後援について承認した。(佐藤)

2・登山道情報の取得と国土地理

院への情報提供の手続きについて報告があった。(佐藤)

3・110周年記念事業の推進状況について報告があった。(佐藤)

4・創立110周年記念式典と平成27年度晩餐会の準備状況について報告があった。(佐藤)

5・NMAアンツェリン会長が10月28日(水)に日本山岳会を表敬訪問した際の打合せ模様について報告があった。(小林)

6・「マナスル登頂60周年記念事業WG」会議の開催予定等について報告があった。(小林)

7・日本山岳会再生委員会における検討状況。各理事より以下の検討状況について報告があった。

(1)会員制度のあり方(吉川)

(2)日本山岳会団体登山保険の強化策(吉川)

(3)会員証のカード化と会員サービスの充実(佐藤)

8・上高地山岳研究所水道工事の完了について報告があった。(大槻)

9・山行委員会から2016年度海外トレッキング・ツアーの概要について報告があった。(勝山)

10・第10回「日中韓三国学生交流登山」日本開催の概要について報

告があった。(中山)

11・学生部マラソン大会の準備状況について報告があった。(落合)

12・ネパール大地震救援募金の状況について報告があった。(佐藤)

13・10月27日(火)開催の第2回評議員懇談会での意見について報告があった。(谷内)

14・「山」11月号の発行について報告があった。(神長)

【連絡事項】

1・安曇野アートラインシンポジウム「北アルプスと山岳写真の魅力」11月23日(月・祝) 安曇野

市穂高交流学習センター
 2・岳都・松本 山岳フォーラム
 11月28日(土)・29日(日) まつもと市
 民芸術館
 3・日本勤労者山岳連盟望年会の
 ご案内 12月4日(金)18:30 飯
 田橋・労山事務所
 4・日本ヒマラヤ協会2015華
 甲望年会 12月12日(土)18:00 〃
 プラザエフ

【今後の予定】

1・学生部マラソン大会 11月14
 日(土)・15日(日)
 2・冬山遭難防止対策セミナー
 11月16日(月)19時 東京体育館
 3・全国山の協議会役員会 11
 月20日(金)15時30分 〃15時45分 プ
 ラザエフ
 4・110周年記念御嶽山シンポ
 ジウム 12月4日(金)18時 慈恵
 医大高木講堂
 5・支部長会議 12月5日(土)10時
 30分 〃 京王プラザホテル
 6・110周年記念式典・祝賀晩
 餐会 12月5日(土)13時受付開始
 京王プラザホテル
 7・予算・事業計画等
 ・平成27年12月初旬 平成28年度
 支部事業計画・予算提出依頼

・平成28年1月中旬 平成28年度
 支部事業計画・予算提出期限
 ・平成28年1月下旬 平成27年度
 支部事業報告・会計報告提出依頼
 ・平成28年2月下旬 平成27年度
 支部事業報告提出期限
 ・平成28年3月下旬 平成27年度
 支部会計報告提出期限

会員異動(11月分)

物故

馬場 猛(4943) 15・10・25
 松浦輝夫(5107) 15・11・6
 長嶋正浩(8337) 15・11・2
 角崎秀哲(12812) 15・11・27
 退会
 秋野子弦(8720) 京都・滋賀
 高橋正雄(9576) 〃
 中村敏夫(14814) 福岡

ルーム目誌 11月

2日 総務委員会
 4日 常務理事会 総務委員会
 5日 山行委員会
 5日 図書委員会 YOUTH
 CLUB
 6日 支部事業委員会
 9日 総務委員会 スキークラブ
 10日 理事会 山岳研究所運営委

員会 九五会
 11日 山想倶楽部 スケッチクラブ
 12日 国土地理院WG 山岳地理
 クラブ
 13日 総務委員会 マナスル登頂
 60周年記念事業WG
 16日 総務委員会 資料映像委員
 会 バックカントリークラブ
 17日 資料映像委員会 日本山岳
 会再生委員会 00会 スキ
 ークラブ
 18日 青年部 三水会 インドネ
 シア登山隊
 19日 総務委員会 科学委員会
 休山会 みちのり山の会
 20日 総務委員会 山行委員会
 フォトビデオクラブ

21日 日本山岳会再生委員会 山
 の自然学研究会
 24日 総務委員会 YOUTH
 CLUB スケッチクラブ
 25日 自然保護委員会 麗山会
 つくも会
 26日 公益法人運営委員会 学生
 部 高尾の森づくりの会
 山遊会
 27日 総務委員会 資料映像委員
 会 YOUTH CLUB
 28日 資料映像委員会 YOUT
 H CLUB
 30日 総務委員会 海外委員会
 YOUTH CLUB
 11月来室者 512名

INFORM
 O R M
 A T I O N
 インフォメーション

◆樹木観察基礎講座 〃樹木識別
 のヒント 自然保護委員会
 山に入って樹の名前が分かれば、
 と思ったことはありませんか。
 冬の東京で身近な樹々を題材に
 樹木の見分け方を学びます。会員

であればどなたでも参加できます。
 日時 2016年1月24日(日)13:
 30 〃 16:00
 場所 明治神宮及び代々木公園
 集合 明治神宮第一鳥居(JR原
 宿駅そば)

持ち物 筆記用具、お持ちの方は
樹木図鑑

費用 500円(資料代ほか)

講師 山田和人(日本山岳会副会
長、森林インストラクター)

定員 20名(先着順)

申込み 川口章子(できるだけメ

メールで) syunki@pony.ocn.

ne.jp TEL/FAX 047463-

8721

◆スペイン最高峰ティデ山登頂と
ポルトガル本土最高地点へ

山行委員会

山行企画 日本山岳会山行委員会

旅行企画・実施 西遊旅行社(旅

行業第一種607号)

期間 5月15日〜25日(11日間)

費用 55万8000円(別途燃油

サーチャージ・空港税2万30

00円〓11月12日現在、8〜9

名基準)

定員 15名参加の場合(5万円)安

くなります。

大西洋に浮かぶカナリア諸島の

スペイン最高ティデ山(3776

m)は年間400万人もの観光客

が訪れます。ゴンドラが3500

mまであり、どなたでも登れます。

元気な方は下から山小屋泊で登山

します。この時期はカナリア諸島
固有種の花々のベストシーズンで
す。巨大なカルデラの絶景が広が
るラ・パルマ島や太古の森が残る
ゴメラ島もトレッキングします。

問合せ 三井まで TEL&FAX 03-

345115388 TEL 090

1780617601 山行委

員会 sanko@jac.or.jp

◆第25回(創立25周年記念展)

「山好きの山の絵展」開催

アルパインスケッチクラブ

この絵展は毎年2月に開催して
おり、今年は25回目を迎え「創立25
周年記念展」として開催します。60
人の会員が実際に登り、見た山々
を描いた作品です。水彩画、油彩
画、版画など約70点とスケッチブ
ックを展示します。

会期 2月21日(日)〜27日(土)10時〜

19時(初日は12時から/最終日

は17時まで)

会場 JR有楽町駅前 東京交通

会館2Fギャラリー 千代田区

有楽町2-10-1 TEL 03-32

15-7962 入場無料

*「創立25周年記念特別展」を同会
館地下1階エメラルドルームにて

同時開催

◆企画展 ヒマラヤへの憧れ
「東北人の登山記録から防災アウ
トドアへ」

期間 12月15日(火)〜2016年3

月21日(月・祝)

場所 東北歴史博物館

開館 午前9時30分〜午後5時

(発券午後4時30分まで)

休館 毎週月曜日(祝・休日の場

合はその翌平日)年末年始(12

月29日から1月4日まで)

観覧料 常設展料金(一般400

円、高校生以下無料。中・高校

生は身分証等ご提示)。

内容 東北地方の人たちが関わっ

た100を超えるヒマラヤ登山

の記録/世界の尾根ヒマラヤを

大地図と映像で紹介/登山を防

災へとつなげることは?/防

災アウトドア術を学んだ子ども

たちによる活動報告

東北歴史博物館 〒985-08

62 宮城県多賀城市高崎1-22-

1 TEL 022-368-0106

主催・共催(文化庁)/東北アウ

トドア情報センター/東北歴史博

物館 後援(日本ヒマラヤ協会ほ

か

◆編集後記◆

●節目となる110周年の記念式
典および祝賀晩餐会も滞りなく終
わった。膨大な準備作業をお手伝
いいただいた、総務委員会をはじ
め多くの皆さんに感謝したい。ま
た、毎年のことながらこの一大イ
ベントの報告を、わずか4日間で
書き上げてくださった高橋重之会
報委員にもお礼申し上げます。

●かつてトレッキングで訪れたこ
とのある、ネパールのランタン村
が消えてしまったという。あの美
しい村に何が起こったのだろうか。
1月10日のシンポジウムにはぜひ
駆けつけたいと思う。

●今月号はページどりが厳しく、
「山の日に向けて」山を考える⑦は、
申し訳ありませんが1月号に繰り
延べさせていただきます。

(節田重節)

日本山岳会会報 山 847号

2015年(平成27年)12月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 小林政志
編集人 柏 澄子
Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社